

市民が残そうとした郷土の記憶 —牛久市を事例に—

富田 美穂

地域の貴重な「記憶」ともいえる歴史的資料が、収集・整理・保存・発信されることは、その地域の歴史を知るだけでなく、地域住民が地域に親しんだり魅力を再発見したりすることにもつながる。このことは、未来のまちづくりに向けての重要な基盤である。しかしながら、過去の風景や景観といった記憶が急速に失われているという状況が、日本のみならず世界中で起きている。そこで、昔の記憶をたどる最も有効な手段として写真の存在について着目することにした。

デジタル機器が発達した現在とは異なり、1980年代以前の人々にとって写真は特別なものであり、風景や景観、人物など、そこに写し出された被写体は特別に大切なものとして撮影されていると考えられる。したがってその時代の写真について、写真の対象や内容を調査することによって、人々が残そうとした町の風景に意味づけすることができるのではないかと考えた。

以上のことから、自治体で収集された写真を分析することによって、市民が町のどのような風景を残そうとしているのかを明らかにし、市民にとっての町の価値観を明らかにすることを本研究の目的とする。研究対象として、茨城県牛久市教育委員会文化芸術課文化財グループで収集している20世紀の写真を対象とした。また、現在の牛久市の一般的なイメージとの比較対象として、『るるぶ牛久』に掲載されている写真についても調査を行った。

牛久市収集写真の最終的な調査対象である774点について分析した結果、(1)1980年代の写真が248点と最多であること、(2)団体と個人からそれぞれ提供された写真のうち、個人からの提供が多いことなどが明らかになった。

『るるぶ牛久』では、99点を調査した結果、(1)国道や県道、鉄道といった、主要な交通網を中心に紹介していること、(2)シャトーカミヤや牛久大仏、牛久沼に関する記事が多く紹介されていたことなどが明らかになった。

牛久市収集写真と『るるぶ牛久』に掲載された写真において、両者に共通する撮影対象項目が多くみられた。また、同様の構図で撮影された写真も複数確認された。牛久市収集写真と『るるぶ牛久』いずれかにのみ存在する写真も多くあった。牛久市民がそこに実在するものに対して、各人の記憶や感情に関連して、愛着を感じていることに基づいて、その写真を撮ったのではないかと推測できる。また、あえて、「残したい・伝えたい」風景として、強い思いをもって収集プロジェクトに写真を提供した可能性が考えられ、町に対するこのような市民の価値観が、現在の牛久市を形作っているといえる。

今後の課題として、直接住民に対して調査を行うことにより、市民が残そうとした郷土の記憶についてより多面的な分析することができると考える。

(指導教員 白井哲哉)